

4 専門委員長対談

近年、公認会計士の活躍の場は、監査法人のみではなく上場企業・上場準備企業を含む一般の事業会社に広がってきております。また、官公庁等に勤める公認会計士も非常に増えており、社会から公認会計士に対して大きな期待が寄せられていると言えます。

日本公認会計士協会 組織内会計士協議会では「組織内会計士ネットワーク」を開設しており、同ネットワーク会員向けに様々な施策を行っています。

本日は、この組織内会計士協議会に設置されている専門委員会である、「研修企画専門委員会」、「ネットワーク構築専門委員会」、「地域サポート専門委員会」、「広報専門委員会」の専門委員長及び組織内会計士協議会議長にお集まりいただき、組織内会計士の魅力、組織内会計士協議会の活動内容、組織内会計士の今後の展望等について対談を実施いたしました。

この対談の様態を本項において報告いたします。



組織内会計士協議会議長

清水 敬輔 氏

研修企画専門委員会専門委員長

脇 一郎 氏

ネットワーク構築専門委員会専門委員長

澤田 正憲 氏

地域サポート専門委員会専門委員長

吉田 徹 氏

広報専門委員会専門委員長

阿久津 聖 氏

広報専門委員会副専門委員長

青野 奈々子 氏

2. 組織内会計士の魅力及び 将来性について

青野 次のテーマは、『組織内会計士の魅力及び将来性について』です。

まず、清水さんから、ご自身が組織内会計士となった経緯、それから企業内において会計のプロフェッショナルが果たす役割についてお話しいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

清水 私自身、上場会社の経理部門に所属する組織内会計士ですが、私は大学を卒業して直ぐに現在の会社に入りましたので、監査法人の勤務経験はありません。私のような職歴の人間から見ますと、企業内で会計のプロフェッショナルが力を発揮するには、まず、会社の事業のことを知らねばならないと感じます。

たとえば営業の最前線、工場などの現場、経営企画、人事労務、広報など、会計とは違う仕事の経験ができるのも、企業ならではの、組織内会計士の醍醐味ではないでしょうか。会社全体を俯瞰して経営を考えるようになるためには、会計職場だけでキャリアを積んでも不十分な気がします。企業に身を投じる会計士の皆さんには、会計から離れた職場へ行くチャンスにも喜んでチャレンジをしていただきたいと思います。

一方、会計士を雇用する企業の方も、高い能力を持った会計士人材には、期待をかけて様々な分野に挑戦させてあげて欲しいです。そうあってこそ、組織内会計士は単なる「会計職人」の枠を飛び出して、より経営に近いステージで能力を発揮できる人材になり得ると思います。

青野 清水さん、ありがとうございます。私も監査法人勤務を経て組織内会計士になった方をたくさん存じ上げていますが、現場経験がないために、組織に入って

苦勞される方も多いと伺っています。

澤田 監査法人では、会計の知識はすぐ身につく一方で、ビジネスマンとしての幅広いスキルってなかなか身につかなかったなと思っています。逆に組織内会計士になったことで、経営的なスキルや判断力、ビジネスに対する見識を深めるなど幅広いスキルを身に着けることができ非常によかったのかなと思っています。

阿久津 私もそのように感じます。実際、会社に入ってみると、現場の近さを感じました。例えば、経理の仕事であっても上司から言われるのは、「現場で何が起きているかを、まず自分が確認してこい」と言われました。特に、決算のときに経理だと席に座っているかと思いきや、最初に言われたのは、「年度末のこの日になぜ席に座っているんだ。現場に行って請求書回収してこい」と言われたことを覚えています。



阿久津 組織内会計士になったばかりで苦勞したことを少しお話します。公認会計士試験に合格すると実務補習所に通うわけですが、会社から期待されている部分もあったのか仕事を多く割り振られて、補習所に通うのに苦勞したことを覚えています。

苦勞もありましたが、やはり公認会計士として会社に期待されているからこそ、色々な仕事を任されたことが自分の糧になったと感じています。

澤田 少し視点を変えたお話をしますが、組織内会計士の中にはベンチャー企業に勤務する方も多くいます。

ベンチャー企業で働く魅力は、一から会社をつくる面白さ、そしてその会社を成長させる面白さだと思っています。

私は、監査法人を辞めて、実際にベンチャー企業に入社したわけですが、一番苦労したのは、監査法人のときって、クライアントからは、ある意味、完成した資料しか出てこないんですよね。当然なんだけど。一方でベンチャーに入ると、その資料を作るもう一個手前、そもそもの数字を作るプロセスからやらなければいけないんです。監査法人時代にはその辺りが見えてなくて、よくよく考えたら何も分かっていなかったということであらためて感じ、勉強不足を痛感しました。逆にそれを克服していったことで、自分自身も成長できたというところはあったと思っています。

加えて、ベンチャー企業の良さは、仕事のスピード感、自由度、裁量の大きさ、だと思っています。監査法人や大企業だと、サラリーマン的な不満がたくさんあると思いますが、そういった不満がない中で働けるというのは、大変素晴らしいことだと思っています。

吉田 先ほどの自己紹介でも申し上げましたが、私は会計士試験に合格後、監査法人ではなく銀行に就職しました。これは、当時、試験勉強で燃え尽きてしまい、会計とは別のフィールドを見てみたいと考えた結果でした。銀行では会計を必要としない営業の仕事をしていましたが、今振り返ってみてとても良い経験ができたと思っています。

それから、魅力という点ですが、私自身何度か転職をしています。公認会計士という資格がなければ、就職氷河期の中、新卒で銀行に入れたかどうか分からないし、その後、メーカーや、今の会社に入れたのもやっぱり公認会計士という資格が良い方向に作用してい

たのではないかと感じています。公認会計士という監査ができるための資格とお思いの方もいるかもしれませんが、私自身は、どちらかというと資格イコールどこにも行けるチケットであると考えています。

澤田 吉田さんのチケットのお話で思い出しました。僕が、シンプレクス・テクノロジーを上場させたあとに、その企業に留まった理由です。

一つ目の理由は、上場した時に僕、30歳だったのですが、30歳で上場企業の役員として経営に携われるチャンスは、人生で2度ないと感じ、やれるところまでやってみようと感じたからです。若くしてチャンスが巡ってきたのは、やはり公認会計士というチケットがあったからだと思っています。

それからもう一つの理由は、上場するとIR活動をするんですが、IR活動を通じて実際に投資家の方々と会ってみて、初めて誰がどのように有価証券報告書を使っているかを肌で感じる事ができたことです。監査法人にいたときは、有価証券報告書や決算短信をチェックしたりしていたけれど、その利用者である投資家の姿が全然見えていませんでした。自分自身が企業側に回ることで、財務諸表の利用者である投資家がどのような情報を欲していたのかが初めてわかりました。公認会計士が企業側において、投資家が欲している情報を発信していくことが、監査側、企業側、投資家側の全ての世の中の価値向上に繋がるのではないかと感じました。このような仕事をしていきたいと感じたのです。



脇 私は、もともと、組織内会計士を目指したわけではなくて、結果的にそのようになったという形です。当時の私は、グローバルに活動すること、そしてビジネスをすることにとても興味を持っていました。あと、マネジメントがしたいという気持ちも強かったと感じています。もともと私の父が商人なので、その気質を受け継いでいるということもあるかもしれませんが、やはり「儲かるか儲からないか」という仕事をしたいと感じていました。

澤田 儲かるか、儲からないかの仕事ができるのが、組織内会計士の魅力の一つですね。監査法人で頑張っても、会社の収益には直結しないじゃないですか。

脇 そうですね、実地棚卸しなどを行っていても、これをして会社の儲けに繋がるのかな？ と当時は思ってしまったんですね。若気の至りです。やはり商人の血が騒いだのか、もっとビジネスに近いところで仕事をしたいと感じていました。そこで、組織内会計士になりビジネスに直接関わることで「儲かる」近い位置で仕事をすることになったんです。

組織内会計士になってまず感じたのは、基本的に公認会計士というのは世間から見ても全体的に優秀であるということですね。監査法人にいと公認会計士ばかりなので、なかなか気付かないのですが、一般事業会

社には、いろんな方がいて、レベル感もまちまちということもよく分かりました。そこで優秀な公認会計士が監査法人だけにいるのはとてももったいないと感じたんです。例えば、マネジメントとか、ビジネスに近い所で公認会計士はもっと活躍できるのではないかと感じたのです。

青野 脇さん、ありがとうございます。先ほど、吉田さんから、公認会計士の資格を持っているからこそ良い転職ができたというお話がありました。

実は、私も、結婚してから専業主婦になり、子供が幼稚園に入るときに就職活動をしたんですが、なかなか働き口が見つかりませんでした。

その後、公認会計士試験に合格して監査法人に入りました。結局 10 年弱のブランクができ、監査法人では、若い社員と同レベルで働いていましたが、監査法人を退職したとたん、このブランク差がなくなったことを思い出しました。

澤田 吉田さんのおっしゃったチケットですよ。資格がなかったらそういうことになりませんよね。

青野 そう、すごく恩恵を受けたと感じています。

脇 公認会計士って、女性にはすごくいい資格だと私は思いますよ。



吉田 会計というのは、どこの領域でも必要だと思いま

す。最近の社会問題、例えば、環境問題とか、少子高齢化だとかどのような問題を考えるときにも、必ず採算すなわち数字が必要となるわけです。その意味では、公認会計士という資格は、オールマイティーなチケットとなるのではないかと感じています。